

「でたらめ家族」

紫翠いけ

登場人物

平岡なぎさ (35) 美容部員

小林もみじ (14) 中学生

千葉直樹 (32) なぎさの同僚

小林陽平 (44) もみじの父

吉野秋子 (40) もじみの母

小林裕子 (40) もみじの叔母

○なぎさの部屋

築40年の1Kの古いアパート。

スマホのアラームが鳴る。

ベッドから手を伸ばし、アラームを止

める平岡なぎさ(35)

寝ぼけた顔でスマホを見る。

○同・洗面所

顔にパックをしながら念入りにフロス
や歯磨きをする。

○同・リビング

メイク動画を観ながらプロテインを飲
む。

腹筋やスクワット等筋トレ。

鏡でじっくり着替えを選び、念入りに

メイクをする。

なぎさ「よし、行くか」

鞆を持ち、出ようとする、インター
フォンが鳴る。

なぎさ「げ。そろそろ出なきや遅刻なのに。

宅配かな」

なぎさ、不機嫌な顔で玄関ドアを開ける。

なぎさ「はい」

ドアの前には小林紅葉（14）が立っている。

なぎさ「・・・何かご用で？」

紅葉「白々しい。覚えてるでしょ」

なぎさ「えーと、近所の子だっけ」

紅葉「小林です」

なぎさ「どちらの小林さん？」

紅葉「陽平。パパの名前」

なぎさ「ようへい・・・」

紅葉「忘れちゃったの？不倫相手の事。パ

パ、可哀想」

なぎさ「ああ、ああ、あの小林さんね。もち

ろん覚えてるわよ」

なぎさ、言いながら外に出る。

玄関のドアを閉める。

紅葉「忘れるわけないよね。それでうちの

家族は崩壊したんだから」

なぎさ「ごめんね、小林さん。お姉さんもう

仕事行かなきゃいけないから。あなたは学

校行きな。ね。」

紅葉「逃げるの」

なぎさ「逃げるとかじゃないの。学生と違って生活かかっているのよ」

紅葉「・・・」

なぎさ「じゃあ、学校嫌なら家に帰るのよ。

小林さん」

なぎさ、ヒールの音を立てて階段を下りて行く。

その背中をじっと見つめるもみじ。

○百貨店・コスメカウンター

在庫の化粧品の確認をするなぎさ。

横で千葉直樹（32）が商品を並べている。

千葉「それで逃げて来たわけ？」

なぎさ「逃げたんじゃない、出社よ。何で不

倫してた相手のガキが家に来るわけ？」

千葉「そのパパとやらに聞いたんじゃないの」

なぎさ「だとしても、何でわざわざ。もう何

年も前の事なのに」

千葉「なぎさにとっては過去の事でも、向こ

うはそうじゃないかもね」

なぎさ「そんなの私には関係ない」

千葉「さすが、見た目しか取り柄のない女」

なぎさ「うるさい。男を見る目のない男め」

千葉「とつかえひつかえのなぎさよりは俺の

方が恋愛してるから」

なぎさ「恋愛ねえ」

千葉「何だよ」

なぎさ「恋愛なんて、しても多いだけ消耗す

るっていうか、結局みんな私の見た目しか

見てないのよね」

千葉「何、自虐に見せかけたマウント？」

なぎさ「本当の事だから」

千葉、あきれ顔でなぎさを見る。

コスメの棚に客が近づいてみている。

なぎさ・千葉「いらっしやいませー」

その客は制服姿のもみじだ。

なぎさ「げ」

千葉「あれ、中学生？今日学校休みなの？」

なぎさ「あれよ、あれ」

千葉「何？」

なぎさ「不倫相手のガキ」

千葉「家に突撃してきた？」

頷くなぎさ。

千葉「なぎさ行けよ。お前のお客さん」

なぎさ「違うよ。コスメ見に来ただけかもしれ

れないじゃん」

千葉「中学生が一人で平日にこんな所でコス

メ買われたらウチが困る。とにかく家に連

れ帰ってよ」

なぎさ「警察呼べばいいじゃん」

千葉「何かわけがあるんじゃないの？」

なぎさ「知らないよ、そんなの」

千葉「なぎさ」

なぎさ「はい」

千葉「プライベートでの自分の行動の清算は自分で責任もつ！はい、行って」

なぎさ、しぶしぶ返事する。

もみじ、並んだ口紅をじっと見ている。

なぎさ「口紅なんて、中学生が買うもんじゃ
ないわよ」

紅葉「ただ、この色が綺麗だなんて」

なぎさ「その色ね。若い子から年配まで幅広く人に似あう色。だから人気があってロングセラーなんだよ」

紅葉「そう」

なぎさ「そんな事より、学校は？」

紅葉「休み」

なぎさ「家は？」

紅葉「・・・」

なぎさ「連絡してあげるから。ってもうあの人の連絡先知らないけど」

紅葉「もう、いないの」

なぎさ「え？」

紅葉「お父さん、死んじやったから」

なぎさ、思いもよらず、ショックを受
けた顔。

○小林家

郊外にある二階建ての一軒家

○同・リビング

ダイニングの椅子に座るなぎさ。

向かいには赤ん坊をあやす小林裕子

(40)。

少し離れた部屋の隅に紅葉が座ってい
る。

裕子「兄の遺書があったんですよ。紅葉の面

倒はかつての交際相手の片岡さんにお願

いするって」

なぎさ「何で私？しかも遺書って」

裕子「まあおかしい事ですけどね。普通に考

えたら。でもあなたも知ってるでしょ。紅

葉の母親の事」

なぎさ「知ってる。知ってるけど」

裕子「うちも子供が4人いて家も手狭で。それに遺書の中に誓約書つてのが入ってたんですよ」

なぎさ「誓約書・・・」

裕子「兄に借金してましたよね？一千万。全くそんな大金貸すなんて兄もどうかしてるけど。片岡さん、それ返してないんですよ？」

なぎさ「別れたら、精算したものと・・・」

裕子「借用書もありましたよ。誓約書には返

済先は子供の紅葉に引き継がれると」

なぎさ「そんな事書いてあったかな」

裕子「お金を今すぐ紅葉に返すか、返済するまで引き取るか。もちろん引き取ったらその間にかかったお金は差し引いて構いません」

なぎさ「妹さんは紅葉さんが可哀想だと思わないんですか？父親の不倫相手の所で暮らすだなんて」

裕子「どんな家でもあの人よりマシです」

紅葉「……………」

なぎさ「……………」

裕子「うちが兄の遺産を放棄する条件です。

紅葉は可愛いけど、うちじゃ面倒見れないので」

なぎさ、言い返せず黙る。

紅葉、スマホで動画を観ている。

○なぎさの部屋・リビング

入ってくるなぎさと紅葉。

紅葉、大きな荷物を持ちながら部屋に

上がり込む。

じろじろと部屋を見渡す。

紅葉「へー。古いけど、結構広いんだあ」

なぎさ、困惑した表情。

紅葉、ソファに座りリラククスする。

紅葉「うわ！化粧品がいっぱい」

なぎさ、げんなりした顔で紅葉を見る。

○喫茶店・店内

なぎさと千葉、コーヒーを飲みながら
向かい合って座っている。

千葉「結局、引き取る事になったんだ」

なぎさ「一時的によ。全く。もう6年も前の
事なのに」

千葉「でもその紅葉ちゃんは、嫌じゃない

の？父親の元不倫相手の所で暮らすなんて」

なぎさ「他に行き場が無いのよ」

千葉「母親は？」

なぎさ、黙っている。

千葉「ま、いいか。それで、その時借りた大

金はどうしたのよ」

なぎさ「使っちゃった」

千葉「何に？」

なぎさ「いいでしょ何でも」

千葉「またブランドのバッグ？借用書書いて

まで借金するか普通」

なぎさ「返すわよ」

千葉「どうやって？」

なぎさ「金持ちと結婚する」

千葉、あきれ顔。

なぎさ、お冷をグイッと飲む。

○なぎさの部屋（夜）

なぎさ、ビニール袋を持って入ってくる。

紅葉はベツトに寝転がり、漫画を読んでいる。

なぎさ「ずいぶん寛いでるのねー」

紅葉、漫画を見ながら

紅葉「この古い感じが昔のおばあちゃん家みたいで。漫画もたくさんあるし」

なぎさ「中学生でも皮肉って習うのかな？」

なぎさ、引きつった作り笑い。

テーブルに袋を置く。

なぎさ「ご飯買ってきた」

紅葉、ベツトから起きる。

なぎさを取りだしたのは牛丼。

紅葉「これが・・・ご飯？」

なぎさ「これ食べたら、児童養護施設行って
みようか」

菜々美、じつと牛井を見る。

なぎさ「大盛りつゆだくは私のだから。あな
たは並でいいよね？」

紅葉「紅葉ちゃんがいいよ」

なぎさ「……」

紅葉「いつもそう呼んでたじゃん」

なぎさ「覚えてるの？」

紅葉「少しだけ」

なぎさ「……そっか。施設が嫌だったらお
ばさん家にもう一度何とか頼んでみよう

か？」

紅葉「いつもこういうの食べてるの？」

なぎさ「大体ね。楽だしおいしいし。洗い物
も増えない」

紅葉「料理出来ないの？」

なぎさ「出来ないんじゃない、しない
の」

紅葉「ふくん」

なぎさ、勢いよく牛丼をほおぼる。

紅葉「いい事考えたんだけど」

なぎさ「（口を動かしながら）ん？」

紅葉「賭けしない？」

なぎさ「賭けって？」

紅葉「私に世界で一番美味しい手作りハンバーグを作る。それが出来たら、出て行ってもいいよ。借金は返して欲しいから、分割にしてあげる」

なぎさ、牛丼を喉に詰まらせ、咳き込む。

なぎさ「世界で一番って無理でしょ。料理人

じゃないんだから」

紅葉「じゃあ、私が美味しいって言うハンバ

ーグ。簡単でしょ？」

なぎさ「料理・・・この世で一番、人にやって貰いたい事ナンバーワンじゃない」

なぎさ、困惑の表情。

○交差点

信号待ちしている紅葉。

交差点の向かい側に立ち、煙草を吸っている吉野秋子（40）

秋子、紅葉を見ている。

視線に気付く紅葉。

紅葉、信号を渡り、秋子の前を通りすぎる。

秋子「久しぶり」

紅葉、振り返らず立ち止まる。

秋子「無視しないでよ」

紅葉「生きてたんだ？」

秋子「ひどい言い様ね。母親に対して」

紅葉「・・・」

秋子「もう中学？6年前はまだ小さかったけどねえ」

紅葉「あなたは、大分老けたね」

秋子「嫌な事言うわね。お母さんでしょ」

紅葉「老けて男に相手にされなくなった？40過ぎると生き方が顔に出るって聞いた事ある」

ある」

秋子、煙草の火を消す。

秋子「どうしちやったのよ。紅葉、そんな事言う子じゃなかったのに。お父さんに色々吹き込まれたのね」

紅葉「誰のせいで・・・」

秋子「もう男はこりごり。お母さんさつき裕子お婆さんの所行ったのよ」

紅葉「何で」

秋子「紅葉を引き取りたいからに決まってるじゃない」

紅葉「・・・」

秋子「やっぱり気づいたの。血の繋がりが一番大事だって。男は裏切るけど、血は裏切らない」

紅葉「お父さんと私は散々、裏切られてきた」

秋子「そんな事言わないで」

秋子、鞆からスティックキャンディを出す。

秋子「ほらこれ。紅葉、好きだったじゃない」
秋子、紅葉に渡そうとする。

紅葉、秋子の手を払う。

地面に落ちるキャンディ。

紅葉「男に捨てられたから、今度は一

度捨てた子供でいいやって？どれだけ

自分勝手なの」

秋子「紅葉・・・」

紅葉「消去法で選ばれるくらいなら、母親な
んていらない」

紅葉、去っていく。

地面に落ちたキャンディを拾う秋子。

秋子「・・・」

○なぎさの住むアパート・入口（夕）

スーパーの袋を抱えた菜々美が来る。

○同・なぎさの部屋・玄関・外（夕）

千葉が携帯をいじりながら玄関の前に

立っている。

やって来た紅葉に気付く。

紅葉「・・・？」

○同・玄関・中（夜）

なぎさ、ドアを開けて入ってくる。

手にはビニール袋を持っている。

なぎさ「ただいま」

○同・ダイニング（夜）

なぎさ、入ってくる。

千葉・紅葉「おかえり〜」

千葉と紅葉がキッチンで料理をしている。

なぎさ「2人して何してるの？」

千葉「何って晩飯作ってんだよ。今日は

鍋だぞ。お前も早く着替えて来い」

なぎさ「いや、そうじゃなくて、2人知り合

いじゃないよね？」

紅葉「玄関で会ったの」

千葉「そうそう。俺と紅葉ちゃん、妙に気が

合ってたさ」

紅葉「直樹くん、すっごい包丁使いが上手で、

繊細なの。盛り付けも綺麗」

千葉「いや、紅葉ちゃんも中学生とは思えないよ。料理上手でさ」

紅葉「（照れながら）もう。直樹くんみたい
な彼氏欲しいなあ」

千葉「でしょでしょ」

なぎさ「紅葉ちゃん、そいつ好きになっても
時間の無駄よ」

紅葉「えっ？もしかしてなぎさちゃんと付き
合ってるの？」

千葉「うーん、残念ながら不正解」

千葉、紅葉を見てニコリと笑い

千葉「俺、女と子供には興味無いから」

紅葉「あー、そっちかぁ・・・」

紅葉、残念そうな顔。

ガス台の鍋がぐつぐつと煮えている。

3人、鍋を囲んで椅子に座る。

千葉がなぎさと紅葉に鍋を取り分けて
世話を焼く。

千葉「はい、なぎさ」

なぎさ「うん」

なぎさ、自分の皿を見て

なぎさ「えーこんなに野菜いららない。それに椎茸食べれないのに」

千葉、紅葉に取り分けた皿を渡しながら、

千葉「お前はいつもジャンクフードば

っかり食って。野菜を食え野菜を」

なぎさ、不満顔。

千葉「今日だってまた身体に悪い物買って来たんだろ」

千葉、なぎさの買ってきた袋を見る。

なぎさ「ハンバーグよ！紅葉ちゃんが食べ

たいって言うから」

紅葉「私、手作りがいいんだけど」

なぎさ「だから、とりあえず味を研究よ」

なぎさ、袋を取りに行き、椅子に座る。

中からハンバーガーを取り出す。

千葉「お前それハンバーガーだろ！それ

じゃ、参考にならないだろうが！」

なぎさ「なるわよ！だってちゃんと肉が

入ってるんだから」

溜息をつく千葉。

なぎさ、苛立ちながらハンバーガーをムシヤムシヤと食べている。

2人の様子をきよとんと見ていた紅葉、ふいに声を出して笑いだす。

なぎさと千葉、顔を見合わせる。

紅葉「はあく。久しぶりに笑った」

紅葉、鍋の湯気を見つめる。

紅葉「2人って、親子みたい」

なぎさ「口うるさいだけよ。男のくせに」

千葉「お前は口ばっかりの女だけだな」

なぎさ、千葉を睨む。

紅葉「そういう喧嘩出来るっていいな」

なぎさ「そう？腹立つだけよ。気分悪いし」

紅葉「でもさ、わーって言い合っても次の日にはまた元通りになる。言葉ではどう言っても結局一緒にいるんだよね」

なぎさ「・・・」

紅葉「それが、うらやましいな」

千葉「……………」

紅葉、伏し目がちに薄く笑う。

なぎさ「……………」

○同・寝室（夜）

紅葉、ベッドに寝ている。

○同・リビング（夜）

千葉となぎさ、向かい合い、缶ビールを飲んでいる。

千葉「紅葉ちゃん、いい子じゃん」

なぎさ「そう？」

千葉「お前の事恨んでるのか？そうは見えないけど」

なぎさ「……………」

千葉「あの年であんなに料理も出来てさ、苦勞してきたんだな」

なぎさ、缶ビールをグイと飲み干す。

○スーパーマーケット

紅葉、買い物カゴを片手に食材を見て
いる。
お菓子コーナーに来る。
キャラメルを手に取り微笑み、カゴに
入れる。

○街路樹（夕）

街にはクリスマスツリーが並び、華や
かに飾りつけられている。
なぎさと、紅葉、並んで歩く。
紅葉が雑貨店の中くらいの大きさのツ
リーを指さす。
首を振るなぎさ。

○なぎさの部屋・リビング（夜）

部屋の隅にクリスマスツリーが飾られ
ている。
嬉しそうにツリーを眺める紅葉。
なぎさ、その様子を見ている。

○同・玄関・外（朝）

ドアに小さなしめ縄が飾ってある。

○同・リビング（朝）

紅葉がお雑煮を運んでくる。

椅子に座っているなぎさと千葉。

なぎさ「何で正月まで直樹の顔見なきやい
けないのよ」

千葉「おい、文句言うなら雑煮食うな。餅は
俺が持ってきたんだぞ」

なぎさ「餅なんてスーパで切り餅買えるし」
千葉「お前、この餅はつきたてだぞ？わざわざ
ざ持ってきてやったのに」

なぎさ「どうせ、男に振られて正月暇になっ
たんでしょ」

千葉「何だと？」
なぎさ「凶星か」

紅葉、笑いながらおせちを運んでくる。

紅葉「すごい。これ全部紅葉ちゃんか？」
紅葉「ううん。結構買ってきただけでも多い

よ」

紅葉、椅子に座る。

紅葉「でも正月は絶対毎年一緒におせちを食べようってお父さんが言ってるね」

千葉「そうなんだ・・・」

なぎさ「・・・」

○動物園・入口

カップルや親子連れ等、たくさんの人で賑わっている。

1人、立って待っている千葉。

そこへ、なぎさと紅葉が来る。

紅葉「直樹くん！」

気付いて手を振る千葉。

走り寄る紅葉。

紅葉「お待たせ」

なぎさ「何で直樹まで一緒なの？」

千葉「悪かったな、男が俺で」

なぎさ「本当、いい男が良かった」

紅葉、いつの間にか離れた所において、

紅葉「（大声で）2人共々。早く入ろうよ」

なぎさと千葉、微笑む。

千葉「ああしてると、やっぱりまだ中学

生なんだな」

なぎさ「・・・うん」

紅葉「早く早く！」

なぎさと千葉、小走りで紅葉の所に行く。

○動物園内

象やキリンなど見て回る3人。

紅葉、嬉しそうにはしゃいでいる。

紅葉の様子を見て微笑むなぎさと千葉。

3人、ソフトクリームを食べている。

笑顔で話している。

○スーパーマーケット店内（夜）

なぎさと紅葉、並んで食材を選んでいく。

カートを押す紅葉。

なぎさは横からどんどん食材を入れる。

紅葉「なぎさちゃん、お菓子ばかり」

なぎさ「（ギクリとしながら）野菜チップ

ス！」

紅葉「今日はハンバーグの練習だよ」

なぎさ「分かってるよ」

○同・出口

なぎさと紅葉が袋を持って並んで出てくる。

少し離れた場所で煙草を吸う秋子。

楽しそうな二人の様子をじっと見ている。

○なぎさの部屋（夜）

なぎさ、ハンバーグの種をこねている。

その横で紅葉が細かく指導している。

焼きあがったハンバーグは黒こげだ。

紅葉、一口食べる。

なぎさ「（緊張しながら）どう？」

紅葉、黙って首を横に振る。

なぎさ「あーあ、美味しいって言わせて出て行って欲しかったのに」

ニヤニヤしながら言うなぎさ。

紅葉「これじゃあ、まだまだ居座らなきゃ」

なぎさ「それは残念」

と言いながら微笑むなぎさ。

紅葉「これじゃあ、男の人の胃袋掴めないね」

なぎさ「いいの、私は見た目に全振りしてるから。それに相手が私の胃袋掴めばいいのよ」

○公園内・ベンチ

座って肉まんを食べているなぎさ。

スマホでハンバーグのレシピを真剣に見ている。

見ている。

なぎさの視界に煙草の煙が入って来る。

煙草をくわえ、なぎさの隣に座る秋子。

なぎさ「何かご用ですか」

秋子「うちの子、そっちに行ってるでしょ」

なぎさ「・・・家にいますけど」

秋子「そろそろ返してくんない？もう家族ごっこも飽きたんじゃない」

なぎさ「紅葉ちゃんが家にいるのは、陽平さんの遺言でもあるんです」

秋子「あの人は本当に私に何もくれないまま死んじゃったね」

なぎさ「あなたは陽平さんに何か与えたんですか？」

秋子「あげたわよ。若い時の私。そして紅葉を生んであげた。なのに、ちよつと家を空けただけで離婚だなんて」

なぎさ「ちよつとじゃないですよ。何回紅葉ちゃんを置いて家を出ました？」

秋子「もう忘れちゃった」

なぎさ「紅葉ちゃんは忘れてませんよ。私も」

秋子「もう私にはあの子しかいないのよ。今まで散々男に振り回されて、よくわかったの。私には血の繋がったあの子しかいない

って。あの子がいなきや、私には何も残らない」

なぎさ「あなたはいつも自分の事ばかりですね。親として何かやってあげたいとか無いんですか」

秋子「だから、これから取り戻すの。そういうあなたはどうかなの？6年間、忘れて放って置いたんでしょ」

なぎさ「それは、陽平さんに・・・振られて」

秋子「それですぐ諦めたんでしょ。結局その程度なのよ。陽平にも紅葉に対しても」

なぎさ、押し黙る。

秋子「紅葉だって私が心入れ替えたって知ったら喜ぶわ。親子の時間を取り戻すの」

秋子、煙草の火を消す。

秋子「じゃあ、よく考えてね」

去っていく秋子。

なぎさの持つスマホにはハンバーグのレシピの画面が映っている。

なぎさ「（画面を見つめて）・・・・・・」

○なぎさの部屋・キッチン（夜）

なぎさ、フライパンでハンバーグを焼
いている。

○同・リビング（夜）

テーブルの椅子には紅葉と千葉が座つ
て待っている。

なぎさ「お待たせ」

なぎさ、やって来て綺麗に盛り付けさ
れてハンバーグをテーブルに並べる。

千葉「うっわ！お前どうしたの。美味そ
うに見えるんだけど」

紅葉「これ、なぎさちゃんが作ったの？」

なぎさ「当たり前でしょ。私は料理だっ
てやれば出来るのよ」

千葉「まあ、食べてみてからだな。紅葉ちゃ
ん、食べよう」

紅葉「・・・うん」

紅葉と千葉、手を合わせ

紅葉・千葉「いただきます」

それぞれ一口食べる。

千葉「（驚いた顔で）うまい！」

紅葉「……」

なぎさ「本当？良かった」

千葉「いやくもしかしたら俺より美味い

かも」

なぎさ「当然でしょ」

なぎさ、椅子に座る。

なぎさ「紅葉ちゃん、どう？美味しいハンバー

グでしょ？」

紅葉「美味しいけど……」

なぎさ「肉も野菜もいい物使ってこだわ

ったんだよ。この私がここまでの物作

ったんだから認めてもいいんじゃない？」

紅葉「嘘」

なぎさ「え？」

紅葉「昨日までハンバーグの種もまと

もに作れなかったくせに」

紅葉、キッチンへ行き、ゴミ箱をあさる。

中からゴミを取り出す。

ハンバーグの有名店の焼くだけで食べられると書かれたゴミ。

千葉「なぎさ、お前！」

紅葉「こんな物で騙してまで私に出て行って欲しい？」

なぎさ、ハンバーグを食べ始める。

紅葉「こんな、偽物のハンバーグで！」

なぎさ、食べていた手を止める。

なぎさ「だっておかしいでしょ。何で父親の

元不倫相手の所になんているのよ」

紅葉「だから、なぎさちゃんのせいで

家は……」

なぎさ「それはこっちのセリフよ。あなたのお父さんのせいで、私の人生だっておかしくなった」

千葉「なぎさ、やめろ」

なぎさ「あの人に出会わなければ、こん

な気持ちにならずに済んだのに」

紅葉、ショックを受けている。

なぎさ「紅葉ちゃん、本当のお母さんの所に行くべきだよ」

紅葉「何であんな人の所に・・・」

なぎさ「お母さん、今度こそ心を入れ替えたって。紅葉ちゃんと一緒にいたいって」

紅葉「信じられない。それに私は・・・」

なぎさ「私、彼氏できたから。そろそろ邪魔なんだよね。お金は分割で返すから」

千葉「なぎさ」

紅葉「わかった。ごめんね。恋愛の邪魔して。荷物まとめて出てくよ」

なぎさ「そうして」

紅葉、涙目でリビングを出る。

千葉「紅葉ちゃん」

なぎさ、無言でハンバーグを食べる。

×

×

×

○同・なぎさの部屋（朝）

目覚めるなぎさ。

起き上がってベットの方を見る。
そこで寝ていた紅葉の姿がない。
部屋を見渡すと、紅葉の荷物が無くな
っている。

なぎさ「（寂しげな表情）・・・」

○小林家・外観

木造の古い一軒家。

玄関にぼうつと立つ紅葉。

それを出迎える秋子。

秋子「よく帰ってきたわね。お母さん、

ずっと心配してたんだから」

紅葉「お母さん、もう男の人はいないの？」

秋子、紅葉を抱きしめる。

秋子「お母さん、あんたがいれば充分よ」

菜々美、虚ろな顔でされるがままだ。

○池のある広場

なぎさ、手摺に寄りかかり、ボーっと
空を見ている。

千葉が隣に立つ。

千葉「紅葉ちゃん、母親のどこだった？」

なぎさ「うん」

千葉「そっか。寂しいけど、仕方ないよな。

俺らは紅葉ちゃんにとっては他人なわけだし」

なぎさ「本当、清々したわよ。これでまた男探し再会出来るわ」

千葉「全然嬉しそうに見えないけど？」

なぎさ「はぁ？嬉しいっての」

なぎさ、近くにいた若い男に声をかける。

その様子を呆れた顔で見る千葉。

○なぎさの部屋（夜）

ベットに座るなぎさ。

右手にはめていた指輪を外す。

手で持ちながらじっと見つめる。

立ちあがり、ゴミ箱に捨てようとするも、思い直す。

ふとダーツが目に入る。

指輪の穴の部分にダーツを指し、ひっかける様にしてぶら下げる。

○同・キッチン（夜）

黙々と料理をするなぎさ。

ハンバーグの種をこねている。

種をフライパンで焼く。

2つの皿にそれぞれハンバーグを盛り付ける。

ハンバーグは焦げている。

玄関のインターホンが鳴る。

○同・なぎさの部屋・玄関（夜）

急いでドアを開けると、千葉がいる。

なぎさ、がっかりした顔。

千葉「飯食った？」

○同・なぎさの部屋・リビング（夜）

千葉、中に入る。

なぎさ「これから食べるよ」

千葉、テーブルのハンバーグを見つめる。

千葉「……」

なぎさ「作ったけど、食べる？」

千葉「ああ、食べるよ」

無言で食べる2人。

なぎさ「どう？美味いでしょ？」

千葉「……いや、今まで食った事ないくら

い……」

なぎさ「……」

千葉「世界一まずい」

なぎさ「（放心した様子で）……」

なぎさの頬から涙が流れる。

なぎさ「世界一、かぁ」

なぎさ、泣きながら笑っている。

千葉「……」

○同・なぎさの部屋・寝室（夜）

泣き腫らし目でベッドに寝るなぎさ。

千葉、なぎさを見下ろしている。
部屋を出ようとし、ダーツに気がつく。
ダーツにかかった指輪を見つめる。

○同・寝室（朝）

目覚ましで起きるなぎさ。
着替え等慌ただしく準備をしている。
ダーツを見ると、指輪が無くなっている。

なぎさ、ショックで呆然とする。

○路地（朝）

携帯で電話をかけるなぎさ。
呼び出し音が何度も鳴る。

なぎさ「何で出ないのよ、直樹のやつ」

なぎさ、電話を一度切る。

発信履歴は千葉だらけになっている。

千葉から電話がかかってくる。

なぎさ「（怒りながら）もしもし直樹？」

千葉の声「はいはい」

なぎさ「はいはい、じゃないわよ！あんた
でしょ。指輪」

千葉の声「あゝ、あれ？いらなないのかと思
った」

なぎさ「早く返してよ」

千葉の声「もうあげちゃったよ」

なぎさ「あげた！？誰に？」

千葉の声「紅葉ちゃん」

なぎさ、驚く。

千葉の声「返して欲しかったら、直接紅葉ち
ゃんに言えよなく。じゃあ、俺忙しいから」

電話、切れてしまう。

なぎさ「・・・・」

○中学校（夕）

下校する生徒達。

校門から少し離れた場所で様子をみて
いるなぎさ。

紅葉が門から出てくる。

なぎさ「紅葉ちゃ・・・」

声をかけようと出かけた時、秋子も紅葉の近くに寄って話しかける。
なぎさ、思わず身を引っ込める。
紅葉と秋子、歩いて行ってしまふ。
見送る事しか出来ないなぎさ。

○路地（夕）

紅葉と秋子、並んで歩いている。

秋子「早かったね。今日の夕飯何が食べた
い？」

紅葉「何でもいいよ。母さん、バイトは？」

秋子「ああ、あの店、時給が安いくせにこき
使ってるさいから辞めたの」

紅葉「また・・・」

秋子「ねえ、紅葉。聞きたいんだけど、
お父さんの通帳ってどこかにあるの？」

紅葉「・・・」

秋子「ね、当面の生活費だけでも。紅葉の学
費とか色々お金かかるし」

紅葉「（冷めた顔で）ないよ。知らない。裕

子おばさんが預かってるんじゃない」

秋子「（がっかりした顔で）ふーん・・・」

○小林家・客間（夜）

真っ暗な部屋。紅葉が寝ている。

暗い中、ごそごと何かを探す秋子。

紅葉の荷物に手をかける。

気付かず寝たままの紅葉。

○（日替わり）同・客間（朝）

紅葉、目が覚める。

しんとした室内。

紅葉「お母さん？」

○同・居間（朝）

散らかった室内。

シンクの汚れた食器は放置されたまま。

紅葉「仕事行ったの・・・？」

秋子の荷物がごっそり無くなっている
事に気づく。

紅葉、ハツとし、客間に戻る。

○同・客間（朝）

紅葉、自分の荷物を確認する。

小さなポーチを開ける。中には何も無
くなっている。

紅葉「通帳・・・」

愕然とする紅葉。

バックをひっくり返す。

中身が散乱する。

紅葉、出て来た1つのサイコロキヤラ

メルを見つめ、手に持つ。

祈る様に手に包み込む紅葉。

○橋の上（夜）

手摺りにもたれ、川を見ている紅葉。

大きな荷物を抱えている。

千葉がやって来る。

千葉「紅葉ちゃん」

菜々美「・・・直樹くん」

千葉「家出娘だな」

紅葉、笑いながら

紅葉「違うの。家出はあの人。お父さんの

お金持って。多分また男の人の所」

千葉「そっかあ」

紅葉「何回目だろう」

紅葉、橋を見渡しながら

紅葉「この橋。走った事がある。寒い日で、
暗くて、でもひたすら走った」

○（回想）橋の上（夜）

紅葉（8）、息を切らし走っている。

大声で叫ぶ。

紅葉「母さーん！！！」

少し遠くで男と並んで歩く秋子（3

4）。

秋子、振り返り立ち止まる。

紅葉、必死に走り、秋子の所に来る。

紅葉「母さん、どこに行くの？また戻ってく
るよね」

紅葉から目をそらす秋子。

紅葉「ねえ、お母さん」

紅葉、ポケットからサイコロキャラメルを出す。

紅葉「もみじ、持久走で十番になったんだよ。だから参加賞のキャラメル2個も貰ったの。みんな1個だけなのに」

紅葉、キャラメルを差し出し

紅葉「母さんに1個あげる。だから、

家に帰ろう」

俯く秋子。

紅葉から背を向け歩きだす。

「母さん・・・」

紅葉が伸ばした手を秋子が払う。

サイコロキャラメルが2個、地面に落ちる。

秋子、振り向かず男の方へ歩いていく。

しばらく呆然とする紅葉。

紅葉、地面にしゃがみ込み、落ちたキヤラメルを見つめている。

紅葉「いっぱい練習して、頑張ったのにな」
紅葉の視界にヒール靴を履いた足が入ってくる。

見上げる紅葉。

そこには、なぎさ（29）が立っている。

なぎさ、地面にしゃがみ、落ちたキヤラメルを拾う。

なぎさ「サイコロキヤラメルだね」

なぎさ、1箱を自分が持ち、もう1箱を紅葉に渡す。

なぎさ「振ってみて」

紅葉、サイコロキヤラメルを振る。4の目が出る。

なぎさ「サイコロに意味があると思う？」

紅葉「意味？」

なぎさ「出たら、目に従う。サイコロの目つ

ていいかげんでしょ。運まかせみたいなもの。でも振った時点でもう運命は決まってるし、従わなきゃいけない」

なぎさ、サイコロを振る。1が出る。

なぎさ「人生ってでたらめなの」

紅葉「でたらめ？」

なぎさ「でもでたらめだから、いくらでも変えられる。何回でもサイコロを振ればいいの」

なぎさ、今度は2つのサイコロを振る。

4と6が出る。

なぎさ「どうにもならなくなったら・・・」

なぎさ、キャラメルの箱を開ける。

なぎさ「食べるの。無かった事にする」

なぎさ、キャラメルを口に入れて笑う。

なぎさ、キャラメルを紅葉に渡す。

紅葉、キャラメルをじっと見て、箱を開け、口に入れる。

紅葉の頬に涙が溢れ、段々嗚咽まじりに泣き出す。

紅葉「無かった事に出来るの？」

なぎさ「簡単よ。笑えばいい」

なぎさ、優しい顔で笑う。

紅葉もつられて笑う。

○（回想終わり）橋の上（夜）

紅葉「魔法使いみたいだと思った。あんなに

悲しかったのに、泣きやんだんだもん」

千葉「・・・」

紅葉「なぎさちゃんは、魔法使いなんだよ。

私が辛い時は助けてくれる」

千葉「・・・かもな」

千葉、橋の遠くを見つめる。

なぎさがヒールで走る姿が見える。

紅葉、なぎさの姿に気付く。

息を切らし、走ってくるなぎさ。

紅葉の前に来る。

なぎさ「何で・・・（息が荒い）」

紅葉「・・・」

なぎさ「何で、電話出ないのよ」

紅葉「・・・」

なぎさ「紅葉ちゃん、まだ14歳でしょ。大人ぶったって、強がったって無駄なのよ」

紅葉、俯いている。

なぎさ「直樹から聞いて、驚いたよ」

千葉「（紅葉に）ごめん、勝手に連絡しちゃった」

なぎさ「何で家に来ないのよ。まだ、美味しいハンバーグ、食べてないじゃない。さてよ、償い」

紅葉の目からポロポロと涙が地面に落ちる。

紅葉「私にはもう、家族がいないの。お父さんだけだった。裕子おばさんは良い人だけど、私の居場所ってどこなんだろうって。そんな時、思い出したの。なぎさちゃんの事。ごめんなさい」

なぎさ、紅葉の手を握る。

なぎさ「紅葉ちゃん。私、嘘ついてた。あな

たのお父さん。陽平さんと出会わなければ
って言った事。本当は出会えて幸せだった」
なぎさ、涙を流している。

なぎさ「紅葉ちゃんを見てると、あの人を思
い出して、嬉しくて辛かった」

紅葉「うん」

千葉「・・・」

なぎさ「そんな風に思えた人達は今までいな
かったから」

紅葉、ポケットから指輪を出す。

紅葉「この指輪、返すね」

なぎさ、受け取る。

なぎさ「ありがとう世界一大事な指輪。陽平
さんからのプレゼント」

なぎさ、右手の薬指に指輪をはめる。

紅葉「お父さん、やっぱり本気だったんだ」

紅葉、鞆からサイコロキャラメルを出
し、地面に転がす。

紅葉「何回でもサイコロを振れる？」

なぎさ、微笑みながら

なぎさ「うん」

紅葉「でたらめな人生でも？」

なぎさ「そうよ。だから、私と一緒にどう転

ぶかわからない生活、してみる？」

紅葉「怖いなあ」

なぎさ「でしょ。何せ借金1千万ですから」

紅葉「でも楽しそう」

なぎさ「うん。料理もきつとうまくなる。お

金もいつか返せるはず」

紅葉「どうにもならなくなったら・・・？」

なぎさ、サイコロキャラメルを拾う。

中からキャラメルを出す。

1つ食べる。

なぎさ「甘いでしょ」

なぎさ、紅葉にキャラメルを渡す。

食べて笑顔になる紅葉。

千葉、2人に駆け寄る。

なぎさ、千葉にキャラメルを渡す。

○なぎさの部屋・寝室（朝）

寝ているなぎさ。

鳴った目覚まし時計を止め、また寝始め。
める。

キッチンから声が聞こえる。

紅葉の声「なぎさちゃん。起きて！」

紅葉、やって来て、なぎさの布団を剥ぐ。

なぎさ「う・・寒い」

紅葉「会社遅刻するよ」

笑顔の紅葉。

○同・リビング（朝）

和食が並ぶ朝食。

味噌汁を運ぶ紅葉。

なぎさ、椅子に座る。

なぎさ「えー。こんなに食べれない」

紅葉「なぎさちゃん、いつもプロテインで

済ましてたでしょ。駄目だよそんなじゃ」

なぎさ「朝からご飯って重たい・・・」

なぎさ、味噌汁を一口飲む。

なぎさ「おいしい」

紅葉、嬉しそうに微笑む。

紅葉「ほら、早く食べないと遅刻！」

なぎさ「紅葉ちゃん、何かあいつに似て来たね」

紅葉「・・・？」

なぎさ「直樹みたい。口うるさくて」

紅葉、ニヤリと笑い。

紅葉「直樹くんなら嬉しい」

なぎさ「やめときなって！あいつ、男好きで

超口悪いんだよ」

紅葉「女の子好きにならないかな？」

なぎさ「ならないならない。なっても紅葉ち

ゃんじゃ、犯罪になっちゃうし」

紅葉「えー。早く大人になりたい」

玄関のチャイムが鳴る。

紅葉「はい」

○同・玄関・中（朝）

紅葉、ドアを開ける

千葉が立っている。

千葉「紅葉ちゃん、学校送ってくよ」

千葉、鍵をチャラチャラと回す。

紅葉「ありがとう。朝ご飯食べてく？」

千葉「ラッキー。丁度腹減ってた」

○同・リビング（朝）

千葉、入ってくる。

なぎさ「何しに来たのよ」

千葉「紅葉ちゃん、送ってくんだよ」

なぎさ「じゃあ、私も乗せてって。同じ職場

だし。遅刻しそうで」

千葉「全く。ギリギリまで寝てるからそうい

う事になるんだよ」

なぎさ「うるさいわね。そんな事言

ら・・・」

なぎさ、千葉のソーセージを1つ取

り食べる。

千葉「あ、なぎさお前！」

やり取りを見ていた紅葉、笑う。

菜々美「何か、家族みたいだね」

なぎさと千葉、顔を見合わせる。

微笑んで紅葉を見る2人。

○大通りの道（夕）

なぎさ、スーパーの袋を両手に持ち、

大股で歩いている。

少し後ろに紅葉と千葉が歩く。

千葉「何か、あいつ気合入ってるな」

紅葉「今日こそ美味しいハンバーグで認めさせるって」

千葉「そういえばもう家出てくっていうあの

賭けはなし？」

紅葉「うん。美味しいハンバーグは、プライ

ストレス」

紅葉、いたずらっぽく笑う。

紅葉「なぎさちゃん、今日はズル無しだからね」

なぎさ「当然でしょ。この私に任せなさい」

千葉「食える物作ってくれよな」

並んで歩く3人。

○なぎさの部屋・リビング（夜）

緊張した顔で立ち、紅葉を見つめるなぎさ。

紅葉、ハンバーグを一口食べる。

千葉「・・・どう？」

なぎさ「・・・」

紅葉「・・・おいしい」

なぎさ、ガッツポーズする。

紅葉「・・・でも」

なぎさ「（不安そうな顔）・・・」

紅葉「世界で二番目かな。一番は父さんのだから」

なぎさ、キリつとした顔で

なぎさ「ふん。これからどんどん練習して絶

対超えるから」

紅葉「うん！」

千葉、微笑ましく2人を見つめる。

○同・寝室（夜）

なぎさの仕事の机の上、紅葉と千葉と
楽しそうに笑った写真が飾られている。
隣にはボロボロになったサイコロキヤ
ラメルの箱が2つ。

部屋の壁には大きく張り紙。

紅葉の文字で借金返済まであと999
万円！と書かれている。

終